

岡田地区遺跡群Ⅰ

岩野・前田線建設工事に伴う文化財発掘調査

東 遺 跡

福岡県筑紫野市大字下見所在遺跡の調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 5 1 集

1 9 9 6

筑紫野市教育委員会

序

筑紫野市は北部九州沿岸地域と内陸部とを結ぶ中継地点として、太古の昔より先人たちが行き交った文化の十字路です。市域には各時代のさまざまな遺跡が静かに眠っておりますが、それは長い間かかって蓄積されてきた先人たちの生きた証しであります。そしてこの過去から連綿と続く人間の営みは、さまざまな喜怒哀楽に塗れながら現代に生きる私たちにとって、またより良き人類の繁栄のためにも受け継いでいくべき財産であります。

しかしながらその一方で、「開発」という名の下に数多の遺跡が破壊の危機に瀕しているのも現状であります。

ともすれば忘れがちなことではありますが、「地域の歴史遺産」は未来に向けて生きる私たちに残すことのできない共有の財産であり、後世の子孫のためにもさらにその保護に一層の努力を重ねていかなければならないと考えております。

最後になりましたが、厳しい寒さのなか発掘作業に従事していただきました方々、ご協力を賜りました関係各位の皆様方に心よりお礼申し上げます。

平成8年9月1日

筑紫野市教育委員会
教育長 永渕 正敏

例 言

1. 本書は、筑紫野市教育委員会が実施した筑紫野市大字下見172番1・5・6に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘に係る遺構実測・遺物実測・写真撮影等は小鹿野亮が行い、遺物の復元および整理作業については鶴浄美・松石かおる・北野正子が行った。また写真測量は(株)大成ジオテック（現場代理人：山中英美）、空中写真は(有)空中写真企画、遺物写真についてはフォトハウスおかに委託した。
3. 遺構の略号は、溝状遺構をSD、土坑をSKとした。また、遺物写真の縮尺は不統一である。
4. 挿図の北は真北を示す。
5. 表紙の題字は、筑紫野市教育委員会 教育長 永渕正敏による。
6. 本書の執筆は小鹿野が担当し、編集については渡邊和子の指導の下、小鹿野が行った。

本文目次

I	発掘調査に至る経過	3
II	周辺の歴史的・地理的環境	3
III	調査の概要	4~10
IV	まとめ	11

插图目次

Fig.1	発掘調査地点位置図 (S1/25,000)	1
Fig.2	発掘調査地点周辺図 (S1/2,500)	2
Fig.3	遺構配置図 (S1/100) [折り込み]	5
Fig.4	SD-1 実測図 (S1/80)	7
Fig.5	SK-1 実測図 (S1/40)	7
Fig.6	SK-2 実測図 (S1/40)	7
Fig.7	SD-4 波板状圧痕実測図 (S1/40)	8
Fig.8	SD-4 出土土器実測図 (S1/3)	8
Fig.9	調査区東側壁土層図 (S1/40)	9
Fig.10	SD-3 西側土層図 (S1/20)	10
Fig.11	出土土器実測図 (S1/2)	10

写真目次

PL1	発掘調査区全景写真 (カラー)	4
PL2	SD-3 西側土層	10
PL3	SD-1・SD-2・SD-3 (垂直写真)	11
PL4	SD-1・SD-2・SD-3 (斜め写真)	11
PL5	SD-4 波板状圧痕	12
PL6	遺物写真	12



Fig.1 発掘調査地点位置図 (S1/25,000)

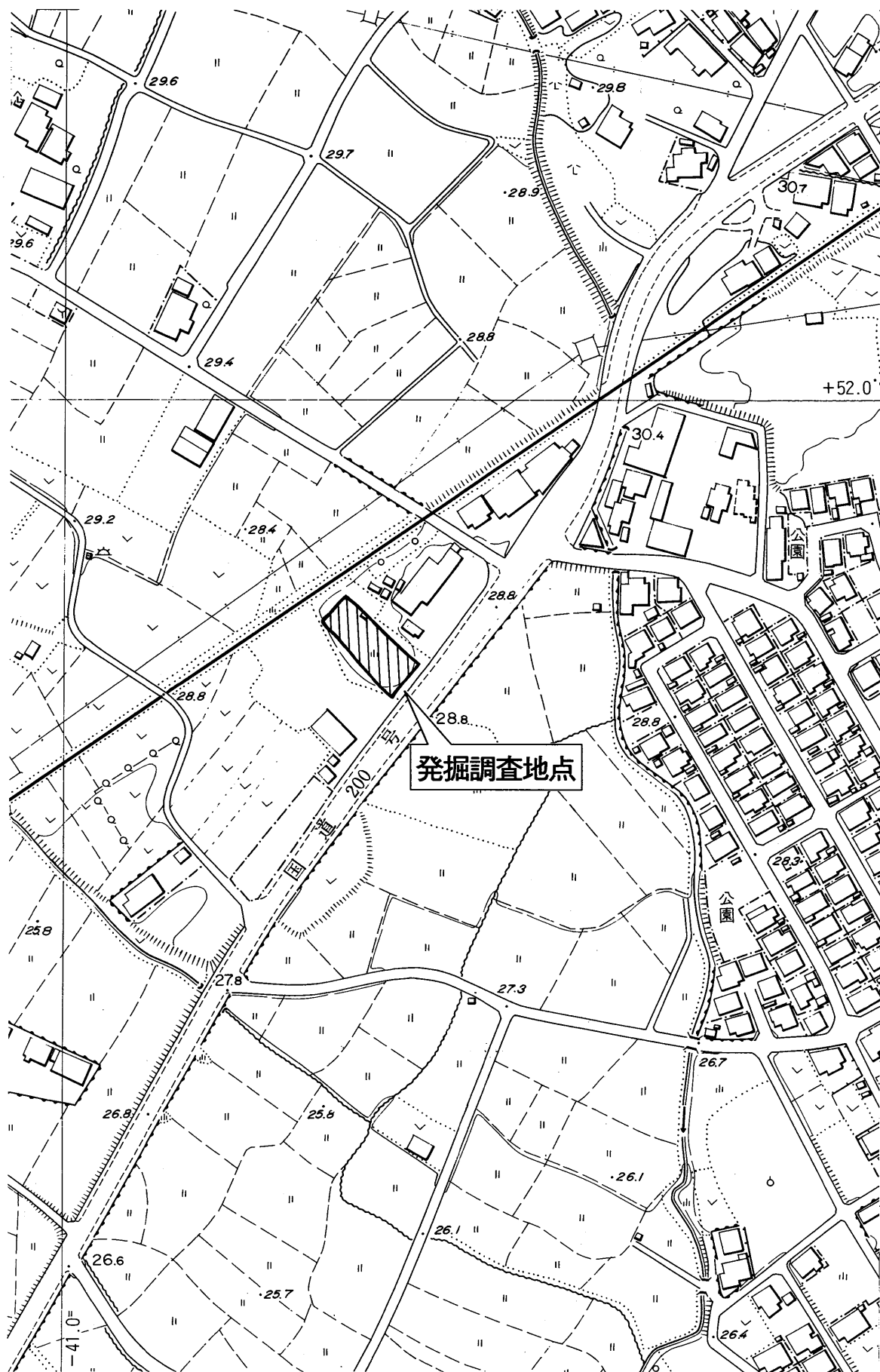


Fig.2 発掘調査地点周辺図 (S1/2,500)

I 調査に至る経過

筑紫野市教育委員会では、平成6年度より筑紫野市岡田土地区画整理事業に伴う文化財発掘調査を実施している。そのなかで筑紫野市建設課より、事業地外の岩野・前田線国道200号線接続部分にあたる筑紫野市大字下見172番1・5・6の文化財所在の有無についての照会がなされた。市教育委員会は、埋蔵文化財が包蔵されている可能性があるため試掘調査が必要である旨の回答を行った。こののち平成7年6月23日に試掘調査を実施し、遺構面を確認した。

この結果を受けて協議を行ったが、工事による掘削の程度から遺構面の保存は不可能であるとの結論に達した。この結果、道路新設部分については発掘調査を実施することとなり、平成7年12月25日に「筑紫野市大字岡田地区地方改善施設整備事業地内文化財に関する覚書」、翌年1月5日に「筑紫野市大字岡田地区地方改善施設整備事業地内文化財調査事務委任協議書」を締結し、発掘調査を行った。調査組織については以下のとおりである。

調査主体	総 括	教 育 長	永 淵 正敏
	庶 務	教 育 部 長	永 田 晋一
		社会教育課長	岡 部 隆充
		文化財担当係長（前任）	森 実 秀美
		課長補佐兼文化財担当係長	古 賀 幸信
		臨 時 職 員	中 富 貴代美
		技 師	小 鹿 野 亮
発掘調査	技 師		小 鹿 野 亮

II 周辺の歴史的・地理的環境（Fig.1・2）

調査区は、宮地岳から派生する丘陵の独立した微地形の縁辺に位置する。周辺は狭長な河岸段丘を形成しており、その南方を迂回して宝満川が流れている。付近の低地は所によっては2m以上に渡り砂礫層と微粒砂層が交互に堆積しており、河川が氾濫と蛇行作用をくり返していたことが推測できる。

宝満川流域には数々の遺跡が所在している。宮地岳山麓には数多くの古墳が知られ、西側裾部には弥生時代の阿志岐シメノグチ遺跡(註1)や弥生時代後期から古墳時代の遺構や^{あしきのうまや}蘆城駅家と推定される遺構が検出されている御笠地区遺跡(註2)がある。また、南側裾部には弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての集落跡である日焼遺跡(註3)や鞭掛遺跡(註4)が所在している。

東遺跡が所在する大字岡田から下見付近については、まだ埋蔵文化財の状況が不明瞭であり、これまでは遺跡の所在が知られていなかった地域である。

註1 『阿志岐シメノグチ遺跡（阿志岐古墳群A群3号墳）』筑紫野市文化財調査報告書第1集 1972

2 『御笠地区遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第15集 1986

3 『日焼遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第20集 1989

4 『鞭掛遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第17集 1987

Ⅲ 調査の概要 (Fig.3, PL.1)

今回の発掘調査は、JR筑豊本線東側の773㎡について実施した。本調査区においては現地表面から2m程が客土であったために、調査は非常に困難をきたした。さらに遺構面はかなりひどい削平を受けており、遺構の遺存状況はあまり良くなかった。

本遺跡では、溝状遺構（SD）15条・土坑（SK）3基・ピット（Pit）142が検出された。調査区の東側は、比較的安定した地山（黄褐色粘質土）上に溝状遺構が4条並行していた（SD-1～SD-3・SD-15）。そのいずれの埋土も暗茶褐色土ベースに黄褐色土塊を含むもので、プランは比較的整っていたが大部分が削平されていたため、時期や性格については不明である。また土坑については、そのほとんどが第6層（Fig. 9）の暗茶褐色粘質土から切り込んでおり、比較的新しい時期のものと考えられる。ピットについても同様の状況であり、建物として並ぶようなものは見出せなかった。

調査区の北東から北西方向については段落ちになっていたことなどから、遺跡の範囲は本調査区から南側に延びている可能性が高いと考えられる。



PL.1 発掘調査区全景写真

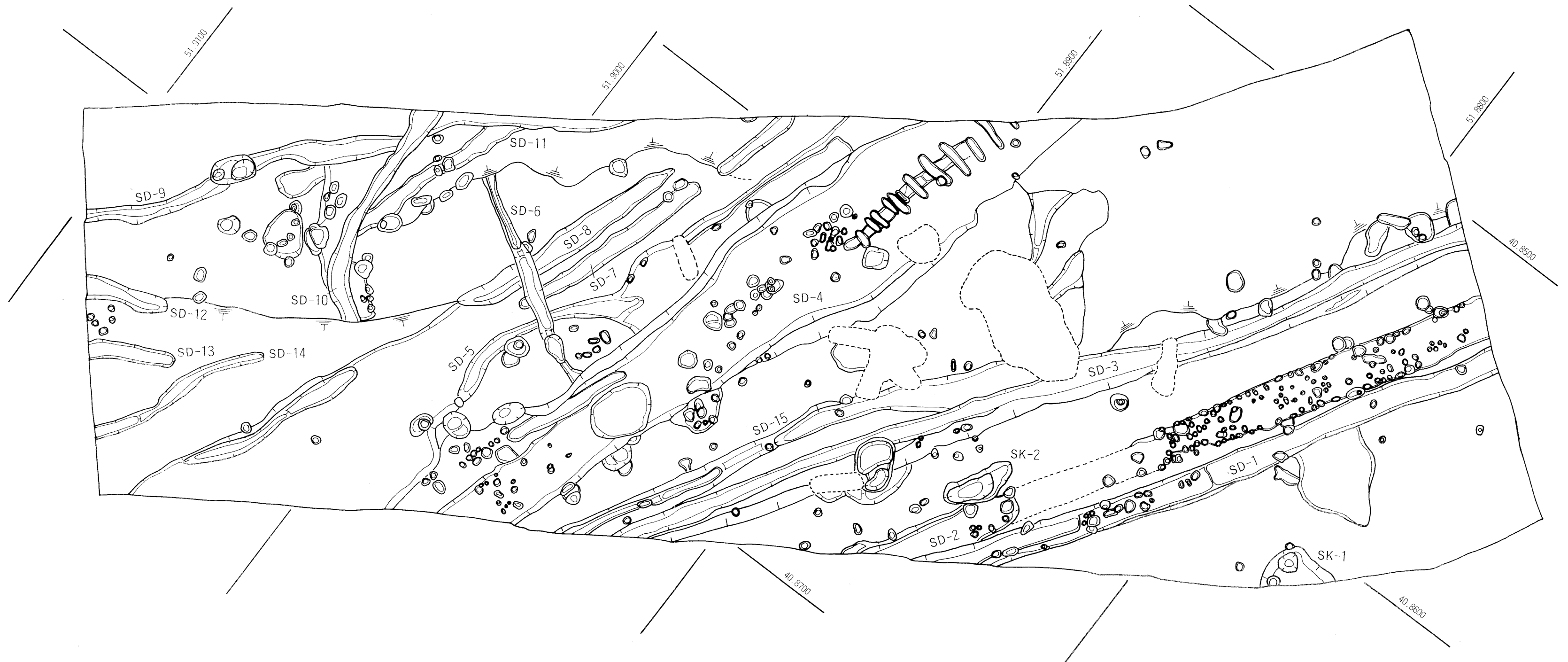


Fig.3 遺構配置図 (S1/100)

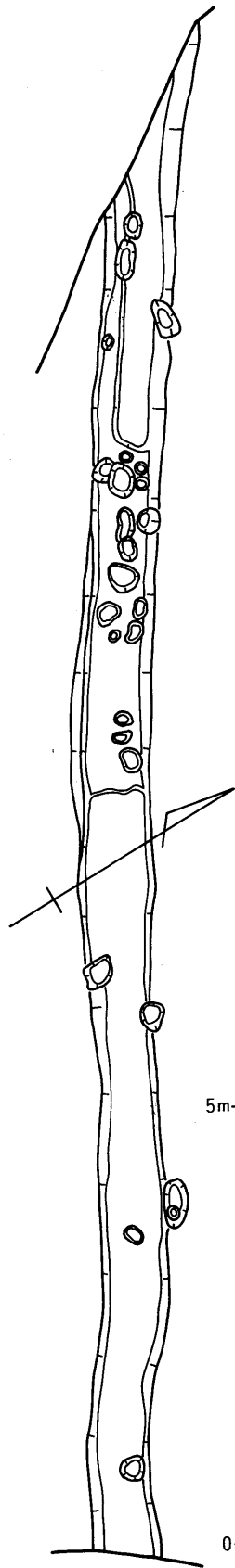


Fig.4 S D-1 実測図 (S1/80)

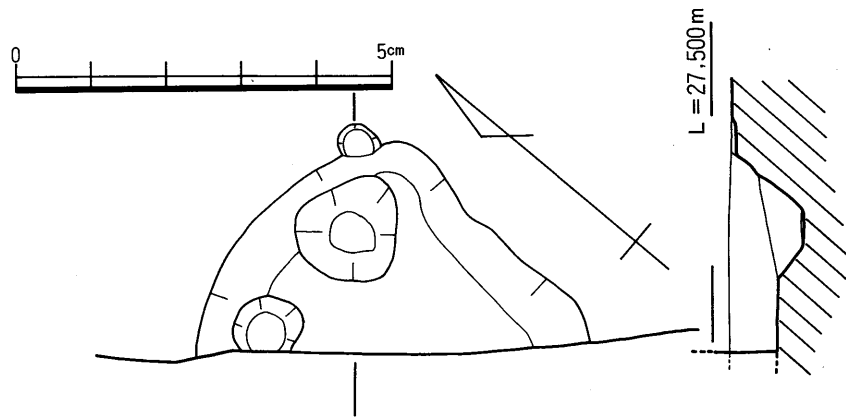


Fig.5 S K-1 実測図 (S1/40)

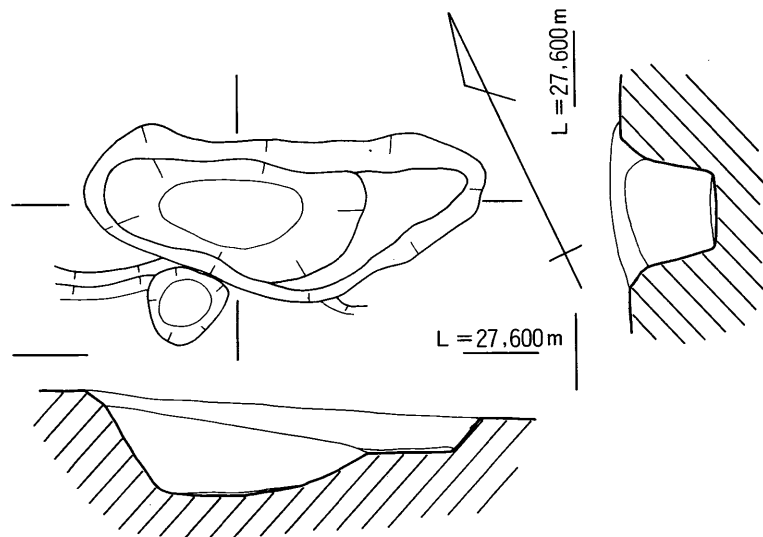


Fig.6 S K-2 実測図 (S1/40)

1 溝状遺構 (S D) (Fig.3・4・9, PL.1・3・4)

本遺跡の溝状遺構は、その主軸方向によって分けると大きく3大別される。第1グループは、S D-1～S D-3・S D-15でその主軸方向はE-30°～35°-Sの範囲である。

S D-1は比較的整ったプランを持ち、床面は平坦をなす。幅60cm・深さ10cmを測り、断面は逆台形状を呈する。

S D-2は削平により遺りが悪く途切れてしまっているが、S D-1に並行し、床面には凹凸があり無数の不連続ピットが検出されている。幅約100cm・深さ3～5cmを測る。

S D-3は、攪乱により一部破壊されているが、残りの良い所では幅60cm・深さ20～25cmを測り、テラスを持つ二段掘りを呈する。

S D-15は若干蛇行するものの他の3条とほぼ並行している。床面は不連続土坑状になっており、凹凸で一定でない。S D-1とほぼ同様に、幅60cm・深さ20～30cmを測る。

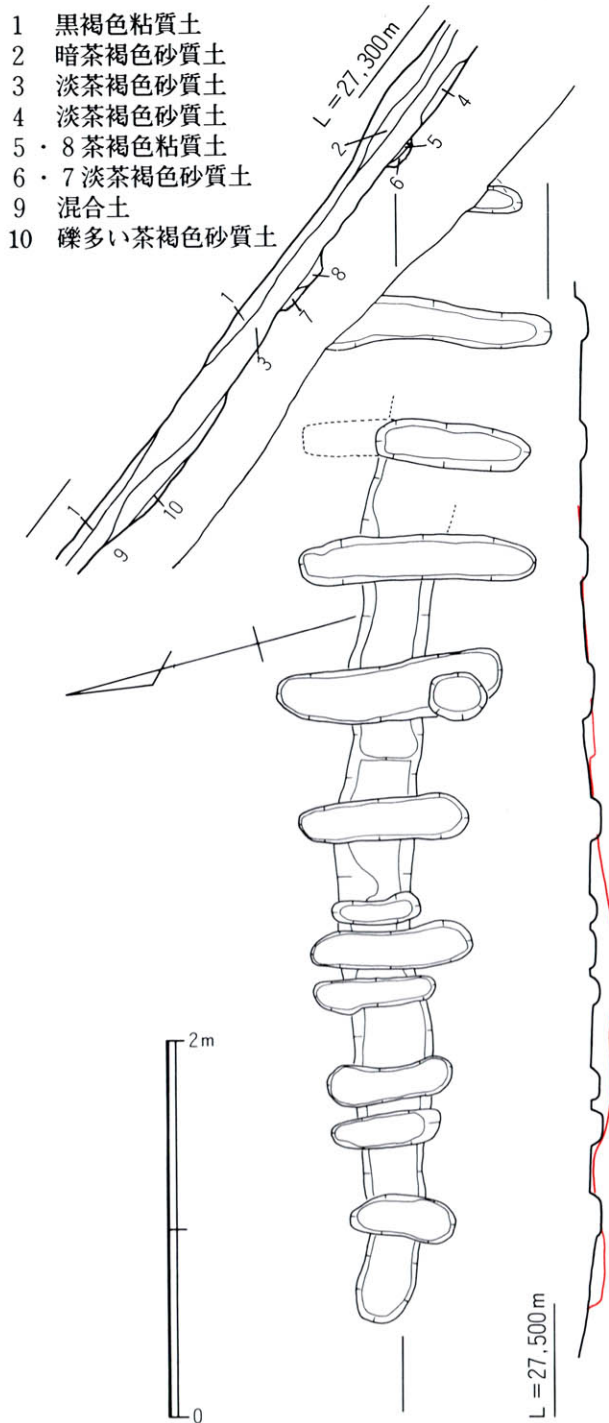


Fig.7 S D-4 波板状圧痕実測図(S1/40)

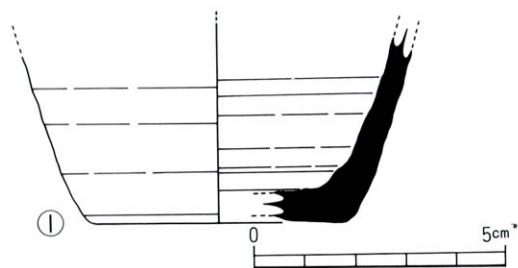


Fig.8 S D-4 出土土器実測図(S1/3)

なお、この一群の溝状遺構に関しては出土遺物は少ないが、Fig.11の③、④、⑥からみても8世紀末～9世紀初頭に埋没したものと考えられる。また、S D-1の南側の地山表面に直径0.5～1cmの小礫が多く確認された。これは他の場所にはみられず、自然のものとは考えにくい。この溝の機能と周辺の遺構との関連については岡田地区遺跡群の本報告で検討したいと考えている。

溝状遺構の第2グループは、S D-4・S D-7・S D-8である。

S D-4については、調査区東側で波板状圧痕を検出した。床面はほぼ一定で、多数の不連続ピットが検出されたが、波板状圧痕に伴うものであるかどうかは不明である。主軸方向は第1グループからやや東に振り、E-25°-Sである。寸法は幅250～300cm・深さ約30cmを測り、部分的に段がつくものの逆台形状を呈する。この遺構は、9世紀頃には埋没したものと考えられる。

S D-7・8はS D-4の北側で並行している。

両方とも幅40～60cm・深さ10cm程度である。S D-4との関係については不明である。

他の溝状遺構については、一定のまとまりもなく遭りが悪い。出土遺物の時期に関してもS D-6 (Fig.11の②) とS D-9 (Fig.11の⑤) の2点しか出土していないため詳細は不明である。

2 土坑 (S K) (Fig.5・6)

土坑については、遺物が出土していないため時期の特定はできなかった。埋土は二基とも、暗茶褐色砂質土ベースに青灰色粘質土塊と炭化物を含んでいた。

S K-1は、南側が調査区外にかかっているが、

平面プランは円形に近い不整形と考えられる。床面は平坦で、深さは25cmを測る。

S K-2は、長軸で220cmを測る。平面プランは楕円形に近い不整形である。途中にテラスを持ち、床面は平坦である。

3 波板状圧痕(Fig.7, PL 5)

波板状圧痕はSD-4の東側で約4mに渡って検出された。東端は調査区外に延びておりどこまで続くのかは不明である。本遺跡の波板状圧痕は、長さ40~90cm・幅15cm・深さ5cm・圧痕間の幅は約30cmを測る。

その圧痕の下には幅25cm・深さ5~10cmの溝状遺構があったが、波板状圧痕との関連性およびその機能については確認できなかった。

圧痕内の埋土については、基本的には黄褐色土塊と黄褐色微粒砂まじりの茶褐色粘質土に土師器や須恵器の細片を含んでいた。その遺物の時期は不明である。また、圧痕の検出面(SD-4の床面)上には、黒色土塊と黄褐色砂質土・粗砂・小礫まじりの茶褐色砂質土(Fig.7の第10層)が部分的に残っていた。念のため、他の検出面(地山)にサブトレンチを入れてみたが、小礫を含む層は確認できなかった。

この一連の検出状況から推測すると、この硬化層については、波板状圧痕直上に人為的に叩き締められた砂利敷きの硬化面である可能性が高いと考えられる。

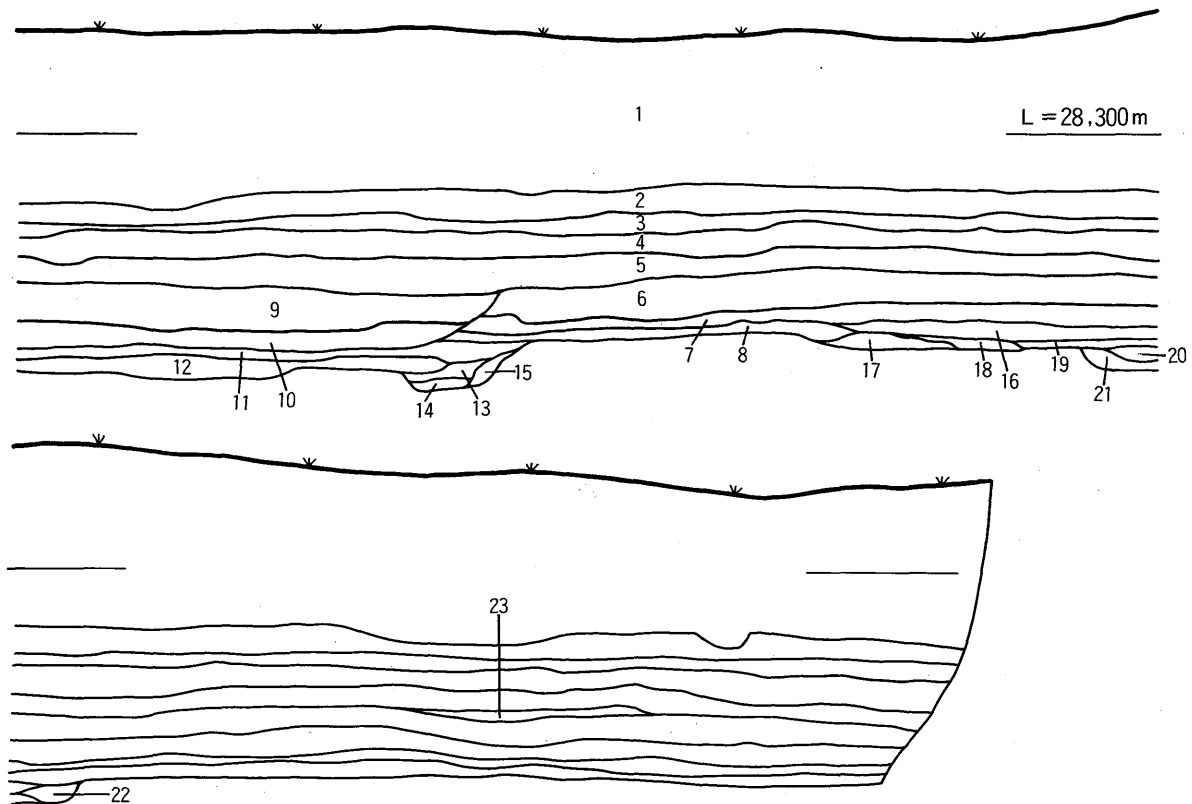


Fig.9 調査区東側壁土層図 (S1/40)

- | | | |
|--------------------|-------------|----------------|
| 1 客土 | 9 暗灰茶褐色粘質土 | 17 混合土 |
| 2 旧耕作土 | 10 暗茶褐色土 | 18 砂まじり茶褐色粘質土 |
| 3 旧耕作土 | 11 暗茶褐色粘質土 | 19 砂まじり暗茶褐色粘質土 |
| 4 床土 | 12 暗茶褐色微粒砂 | 20 茶褐色粘質土 |
| 5 礫まじり暗茶褐色粘質土 | 13 茶褐色粘質土 | 21 混合土 |
| 6 暗茶褐色粘質土 | 14 黒褐色砂質土 | 22 茶褐色土 |
| 7 砂が塊状にまじる暗灰茶褐色粘質土 | 15 暗茶褐色粘質土 | |
| 8 暗灰茶褐色粘質土 | 16 暗灰茶褐色粘質土 | |

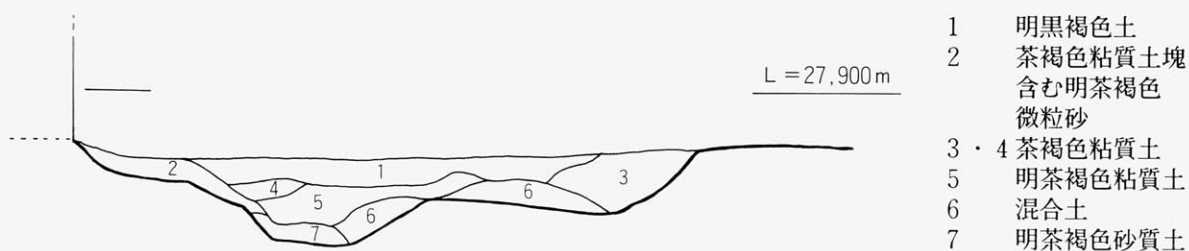
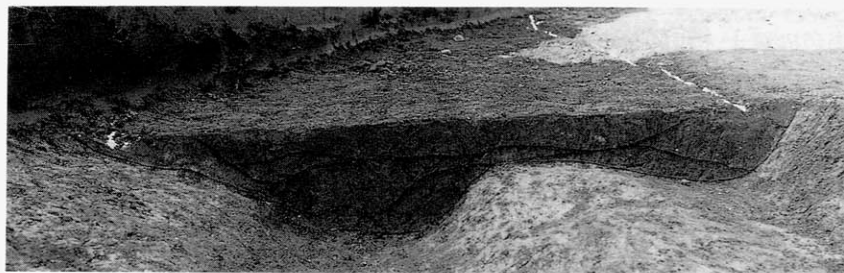


Fig.10 S D-3 西側土層図 (S1/20)



PL.2 S D-3 西側土層

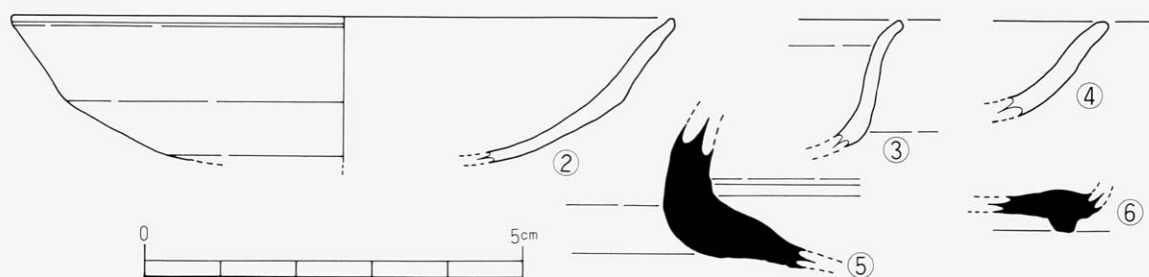


Fig.11 出土土器実測図 (S1/2)

出土土器(Fig.8,11,PL. 5)

①はS D-4、②はS D-6、③はS D-1、④と⑥はS D-3、⑤はS D-9の出土である。

①は須恵器の壺の底部で復元底径は10.0cmを測る。精緻な胎土で焼成は良い。形状は重厚な底部から比較的急に立ち上がる。調整は内外ともヨコナデで、底部外面のみに不定方向のナデを施す。②は瓦質土器の 碗である。体部には明瞭な屈曲があり、そこからやや外反しながら立ち上がる口縁をもつ。体部はかなり開きぎみで復元口径は17.6cmを測る。調整は磨滅により不明瞭であるが、外面についてはナデ、内面についてはミガキbが僅かに確認できる。調整やプロポーションについては黒色土器の特徴を持っている。③は土師器坏で緩やかに外反する口縁部をもつ。④は土師器皿の口縁部である。⑤は須恵器甕の頸部である。胎土中には気泡が多く、黒色砂粒が含まれており、焼成もあまい。内面には青海波、外面にはタタキが残っているが、磨滅が著しい。⑥は須恵器 碗の高台部である。色調は明灰色で、焼成も良く、接合痕が残る。

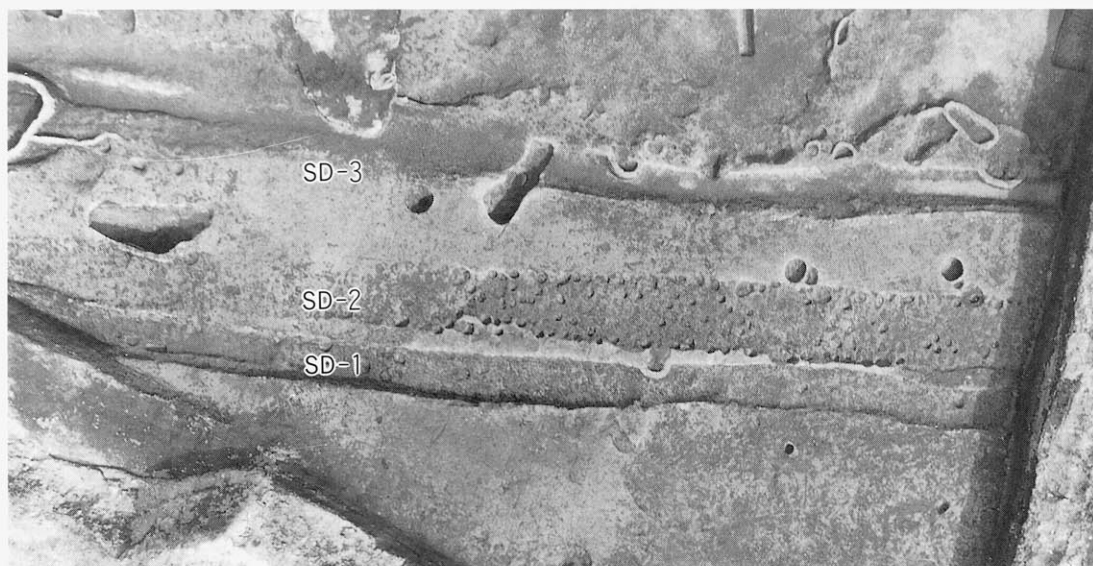
なお、今回の調査で出土した遺物は42点あったが、いずれも細片であったので実測に耐えうるもののみを図示した。

Ⅳ まとめ

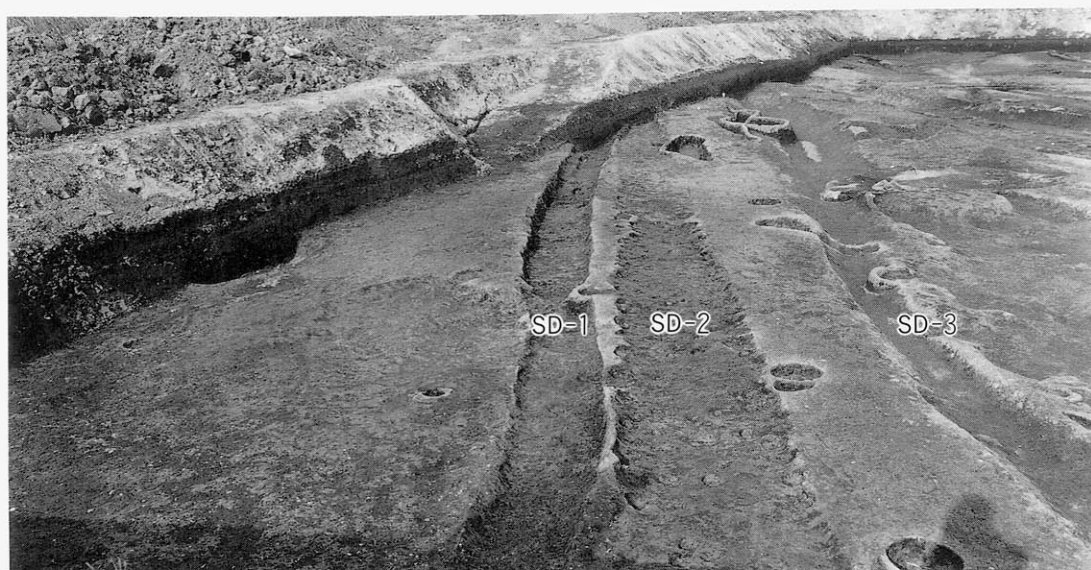
憶測の域を出ないが諸々の状況から推測すると、第1グループの溝（SD-1・2・3・15）については岡田地区において検出されている西海道との関連性が推測できる。しかし周辺地区については土地改変が著しく、現段階における古代の土地景観の復元は困難である。

またSD-4にみられるような波板状圧痕は、道路状遺構に伴うものと考えるのが一般的であり、その機能についての見解は分かれているのが現状であるが、本遺跡の場合はその検出状況等を勘案すると道路状遺構に伴うものとは即断し難く、「何らかの軟弱地盤補強のための地業痕跡」と考えておくのが一番妥当であると考ええる。

いずれにしても今回の発掘調査においては、遺構に伴う遺物は少なく事実報告のみにとどめた。全体的な遺跡の性格やそれぞれの遺構の関連性等についての考察は岡田地区遺跡群の本報告でまとめたいと考えている。



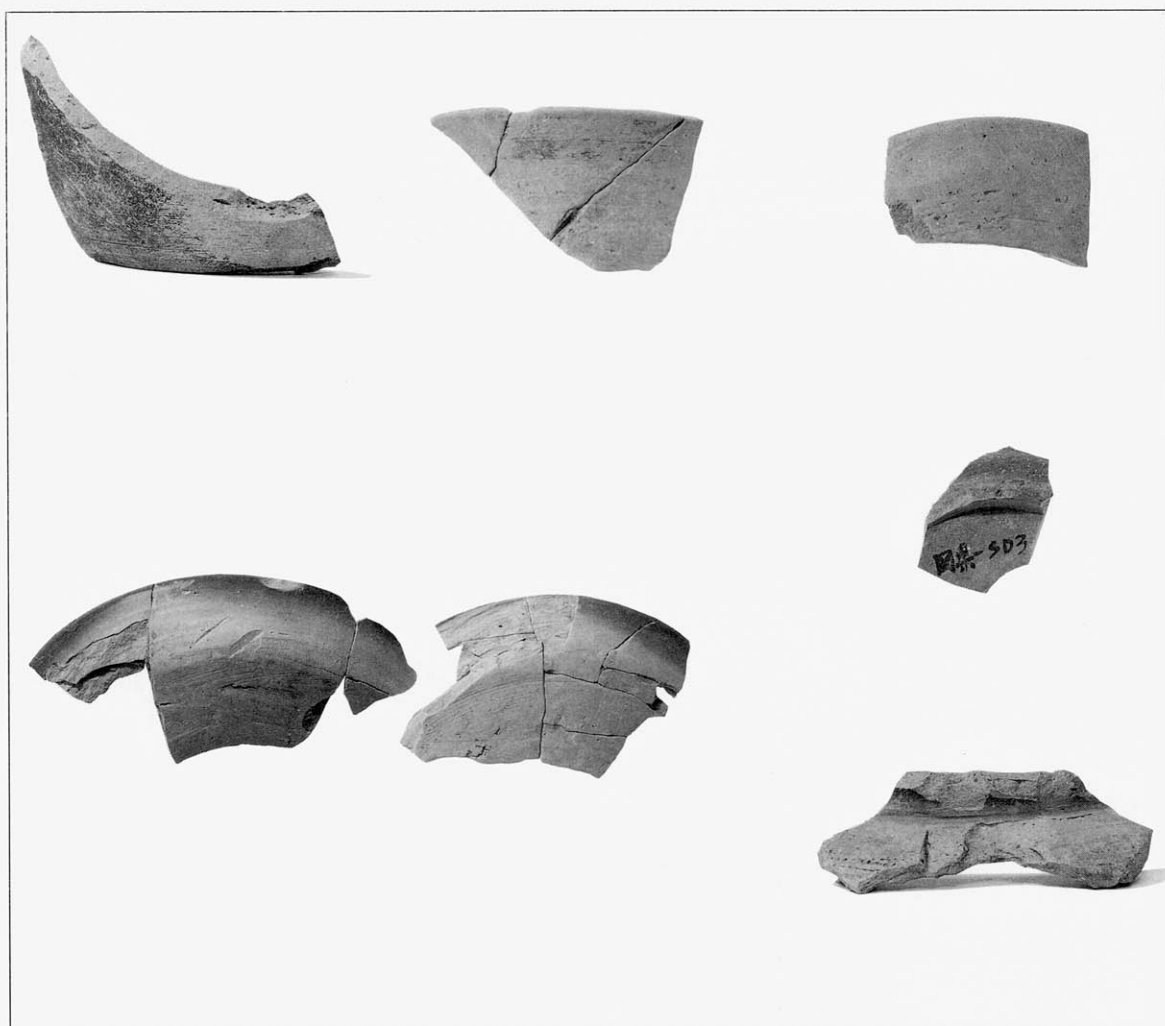
PL.3 SD-1・SD-2・SD-3（垂直写真）



PL.4 SD-1・SD-2・SD-3（斜め写真）



PL. 5 SD-4 波板状压痕



PL. 6 遺物写真

フリガナ		ヒガシイセキ						
書名		岡田地区遺跡群Ⅰ						
副書名		岩野・前田線建設工事に伴う文化財発掘調査						
巻次		Ⅰ						
シリーズ名		筑紫野市文化財調査報告書						
シリーズ番号		第51集						
編集者名		小鹿野 亮						
編集機関		筑紫野市教育委員会						
所在地		〒818 福岡県筑紫野市大字二日市753-1 TEL 092-923-1111						
発行年月日		西暦1996年9月1日						
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
ヒガシ 東	チクシノ 筑紫野市 大字下見 172番1・5・6			33度 28分 2秒	130度 33分 2秒	19960110 } 19960331	773	道路新設 工事に伴 う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
東	集落跡	奈良 } 中世		土坑 3 溝 15 pit 142		須恵器 土師器 瓦質土器他		

岡田地区遺跡群Ⅰ
岩野・前田線建設工事に伴う文化財発掘調査

ひがし

東 遺 跡

筑紫野市大字下見所在遺跡の調査

筑紫野市文化財調査報告書

第51集

発行 筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 秀英社印刷株式会社
福岡県筑紫野市武蔵313-13